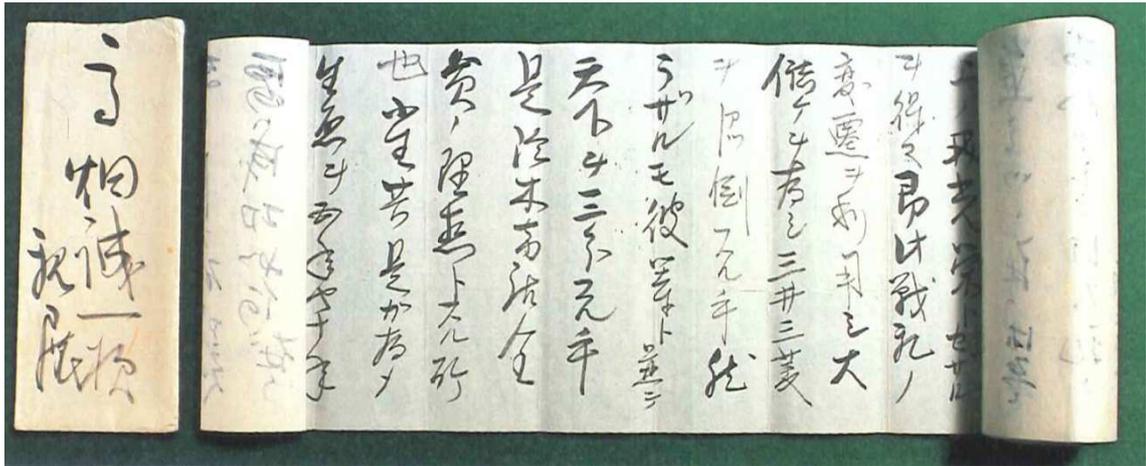


2018年10月27日

「神戸発祥の総合商社の源流・鈴木商店を知る」勉強会 第2回

鈴木商店記念館 小宮 由次

金子直吉書簡シリーズ②「天下三分の宣誓書」 (大正4年11月1日)



大正3(1914)年に勃発した第一次世界大戦による大戦景気を見越し、“一斉買い出動”を敢行した鈴木商店は、莫大な利益をあげた。本書簡は、こうした状況下にあった鈴木商店が千載一遇の好機を捉えて大躍進を期す金子直吉の大号令であった。後年、「天下三分の宣誓書」と云われる金子の熱情溢れる文面には、冷静に戦況を見極め、具体的な行動を指示していることが読み取れる。

◇「小川君の増員を行うもまたロンドン出張所にかくの如き<sup>ごと</sup>余裕<sup>あた</sup>を与えんと欲するに外ならず、」 (6) 112438

大戦景気で忙しくなった鈴木商店は、ロンドン支店強化のため入社3年目の小川実三郎の増員を決めた。高畑誠一支店長以下29名の日本人駐在員の陣容であった。

◇「今日船舶の黄金時代が戦後まで継続するものとせば凡そ何時まで継続すべき哉、戦後運賃界は如何に成りゆくべき乎」 (7) 112441

◇「造船費用は戦前と今日と又何程の差ありや戦後は如何に成行くべき乎」 (12) 112639

第一次世界大戦により我国の海運・造船業界は、未曾有の好景気に沸き、英米に次ぐ世界第3位の造船国に急成長した。鈴木商店は、川崎造船所のストックボート9,000ト

ン型 10 隻を含む 18 隻を大量売却した。運賃（備船料）、船価も大戦前に比べ急上昇したが、大戦終結とともに急落した。

◇「英米における鉄の供給は戦局の如何に拘わらず継続し得らるるや、戦後における需要供給の見込み如何」  
(11) 112635～(12) 112639

第一次世界大戦開戦 3 ヶ月後の大正 3(1914)年 11 月、鈴木商店は、全ての商品・船舶に対する一斉買い出動を敢行、金子は、ロンドンの高畑支店長に対し、“Buy Any Steel, Any Quantity, at Any Price”（鉄と名のつくものは何でも金にいとめをつけずいくらでも買いまくれ）と異例の指令を出した。

しかし、大正 5(1916)年にはイギリスは鋼材輸出を禁止、さらに大正 6(1917)年には、米国の参戦するとともに鋼材輸出を禁止した。

◇「英国如何に富めりと雖も今日の如き大戦を永くやる時は、結局不換紙幣を發行するに至らん・・・」  
(17) 113050

第一次世界大戦で各国は、金本位制を停止していたが、戦争終結後、金本位制に復帰するのか、管理通貨制度に移行して不換紙幣を發行することになるのかが金子直吉の最大の懸念であった。

◇「小寺の場合は豆油の満船積商売を為す事珍らしからざるを以て甚だ羨望に堪えず」

(23) 113126

大豆の一大産地・満州を背景に大連を拠点に大々的な製油事業を展開する「小寺洋行」を追撃せんとする金子直吉の決意が見られる。満鉄の大豆油製造事業を買い取り、鈴木商店大連工場の建設から「豊年製油」、「日本油脂」の設立に繋がって行く。

◇「当方にては銅鉛等製錬事業を開始したるに甚だ好結果也。」 (26) 113142

「小川君持参の砲弾はロシヤの注文にて数か月後より製造する予定也。」

(31) 113217

鈴木商店の非鉄金属製錬事業へ乗り出すきっかけとなった出来事。帝政ロシアと我国の知られざる友好関係が背景にあった。

◇「船舶、先の帝国丸は他に売却（明年七月、六十五万円にて）せり、続いて報国丸のまた売らんとす。」 (29) 113210

【表2】南満州汽船株式会社の保有船舶

| 船名  | 船籍番号 | 総噸数  | 船籍港 | 置籍登録年月日   | 抹消登録年月日    | 抹消事由              | 製造年  | 製造地 | 原名     |
|-----|------|------|-----|-----------|------------|-------------------|------|-----|--------|
| 富国丸 | 49   | 4645 | 大連  | 大正2年1月20日 | 大正5年10月4日  | 橋本汽船に売却後、朝鮮転籍     | 1895 | 英国  | ラングスング |
| 靖国丸 | 56   | 5118 | 大連  | 大正2年5月23日 | 大正5年5月26日  | 山下汽船に売却後、独艦艇により撃沈 | 1893 | 英国  | ベズワダ   |
| 帝国丸 | 71   | 5163 | 大連  | 大正2年7月22日 | 大正5年10月4日  | 山下汽船に売却後、朝鮮転籍     | 1894 | 英国  | マザゴン   |
| 報国丸 | 110  | 5038 | 大連  | 大正3年5月29日 | 大正5年10月20日 | 行方不明              | 1895 | 英国  | スندا   |
| 建国丸 | 119  | 3376 | 大連  | 大正3年10月9日 | 大正5年4月28日  | 独艦艇により撃沈          | 1892 | 英国  | コーネリア  |

出所) 逓信省編『日本船名録 大正四年』pp.370-377。南満州鉄道庶務部調査課編『関東州の置籍船』(1924年) pp.6-10、pp.18-20。神戸市役所編『神戸市史 附録二 神戸海運五十年史』pp.187-193より作成。なお抹消事由の売却先は新聞記事を参考にした。

鈴木商店の“船舶部”の出発点となった「南満州汽船」の事業を見直し、本格的な海運会社「帝国汽船」の設立につながる密かな動きが始まった。南満州汽船の保有船舶「帝国丸」「報国丸」の抹消事由からも本書簡が書かれた時期が大正4(1915)年であることが明らかである。

◇「三井三菱を圧倒する乎、然らざるも彼等と並んで天下を三分する乎、是鈴木商店全員の理想とする所也。」 (37) 113249

本書簡のクライマックスとも云うべき箇所。ロンドン支店の社員のみならず全社員に金子の決意を訴える熱情が伝わってくる。

明治から大正期の貿易業界を牽引した鈴木、三井が激しいデッドヒートを繰り広げ、三菱合資がいよいよ本腰を入れて貿易に乗り出そうとする中、金子直吉の天下を制する決意が溢れている。

◎「三国志演義と天下三分の計」

◎「三国志（正史）と天下三分の計」



三国志演義（三国演義）



三国志（正史）・魏志倭人伝

金子がいずれの“天下三分の計”を意識していたか不明だが、三者の均衡を保つのではなく、天下統一を描いたことは容易に想像できる。

◇「日本海海戦に於ける東郷大将が彼の“<sup>か</sup>帝国の興<sup>ていこく</sup>廢<sup>こうはい</sup>此<sup>こ</sup>の一<sup>いつきよ</sup>挙<sup>あ</sup>に在り”と信号したると同一の心持也」  
(42) 113415

三井、三菱との決戦に臨み、勝利を期す鈴木商店の“Z旗”だったと云える。

◇「十一月一日 須磨自宅にて 金子直吉 高畑君 小林君 小川君」  
(43) 113424

本書簡の日付については、従来諸説あったが、後年、小川実三郎自身が大正4(1915)年のロンドン赴任を明らかにしたことから決着した。